

- 今日のテーマ (前半)

「地中海が生んだ天才建築家ガウディ」の作品と生涯に迫る#01

- 簡単にオンライン用のお名前と地域など教えてください。

- ガウディ についての興味・関心などお聞かせください。

アントニオ・ガウディの生涯

1

建築家の
夢の実現
0~25歳
1852~1877

- ・1852年肩ルーニア州レウスで生まれる・0歳・誕生
- ・1863年11歳・初等教育受ける(1868年)
- ・1871年17歳・父親と姪のローサと共にバルセロナに移住
- ・1873年21歳・バルセロナ建築高等技術学校に入学(~1877年)製図工として工房で働く
- ・1876年24歳アメリカ記念博のスペイン館の図面作成
- ・1877年25歳・カタローニア広場の噴水の設計図作成・卒業制作の大学講堂を手掛ける

2

運命を決定
づけるパトロン、
グエイとの出会い
26~51歳
1878~1902

- ・1878年26歳歳建築家の資格を取得・ガラスショーケース制作しパリ万博スペイン館出品
- ・1882年30歳・バルセロナ大聖堂ファサード設計競技参加、
- ・1883年31歳・サグラダファミリア贖罪聖堂の主任建築家となる(~1926年)
- ・1886年34歳・グエイ邸(~1889)
- ・1891年39歳・カサ・デ・ロス・ポティネス(~1892)
- ・1900年48歳・グエイ公園(~1914)
- ・1902年50歳マリョルカ大聖堂の修復(~1914)

3

ガウディ集大成の
豊穡な建築作品群
52~74歳
1904~1926

- ・1904年52歳・カザ・バットリョ(~1906)
- ・1906年54歳・カザ・ミラ(~1910年)
- ・1908年56歳・テレジア学院のための礼拝堂設計(~1910)
- ・1912年60歳・サンタマリア教区教会の説教壇2基設計
- ・1916年64歳・サグラダファミリア贖罪聖堂受難のファサードの前の記念碑を設計
- ・1926年74歳・バルセロナのサンタ・クルス病院にて死亡(市電にはねられるという不慮の事故)

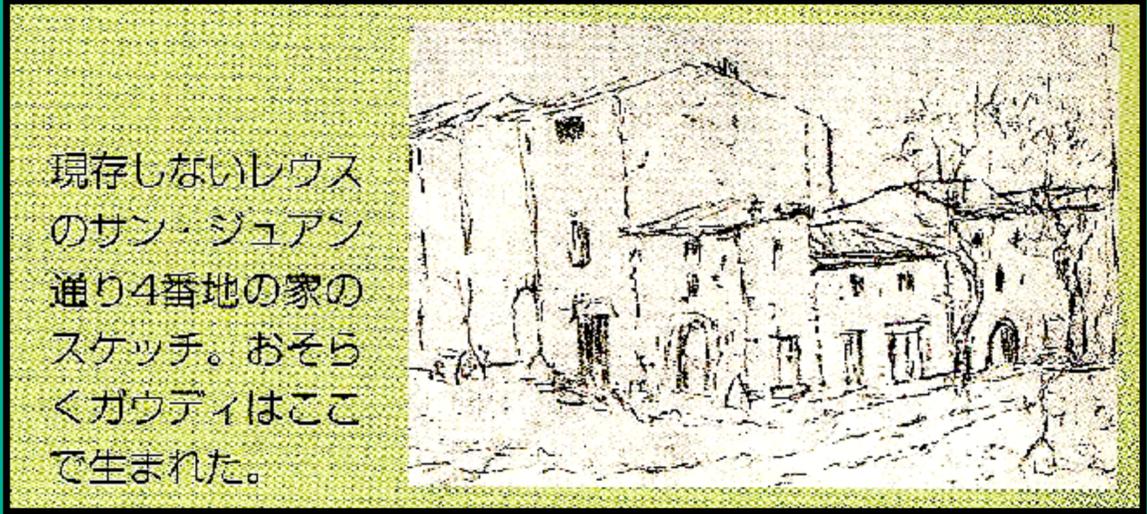
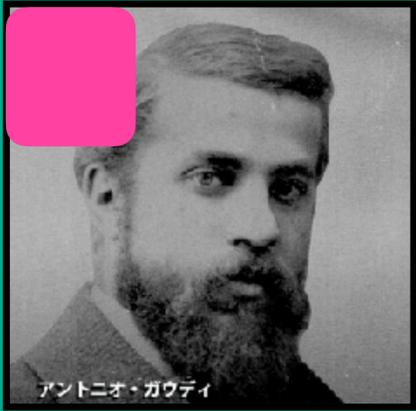
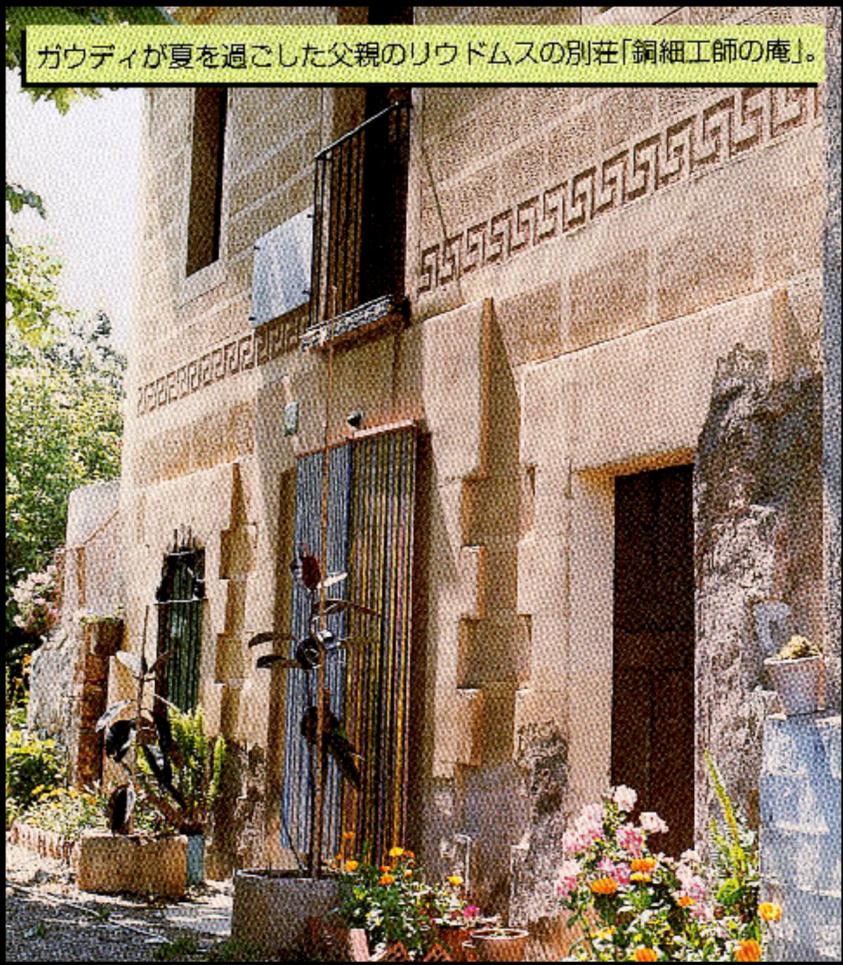
4

サグラダ・
ファミリア
贖罪(しょくざい)聖堂
52~74歳
1904-1926

- ガウディの宗教的・芸術的ヴィジョンの全てが結晶化した建築物
- 建築家は総合的人間である。彼はさまざまな事柄をこれらが作られる前に全体からはっきり見る。
- 彼は諸要素を三次元関係の中に適切な距離に位置付け、結びつける。(ガウディの言葉より)

①-1・1852-1877年・(0~25年)

建築家の夢の実現へ



○ **生まれ故郷レウスの自然**・・・ガウディは**カタルーニャ州タラゴナ県レウス**で生まれる。**父方は代々、銅で鍋釜やワインからブランデーをつくる蒸留器などを製造する銅細工師**で、平たくいえば金物屋であり、**母親の家系も同職であった**という。また、船乗りであった時代もあるようで、家系をたどると中世にまでさかのぼるようだ。一枚の銅板を折り曲げ、叩き延ばしながら三次元のヴォリュームをつくりあげる。この職業に、ガウディは建築家の出自を求めたこともある。

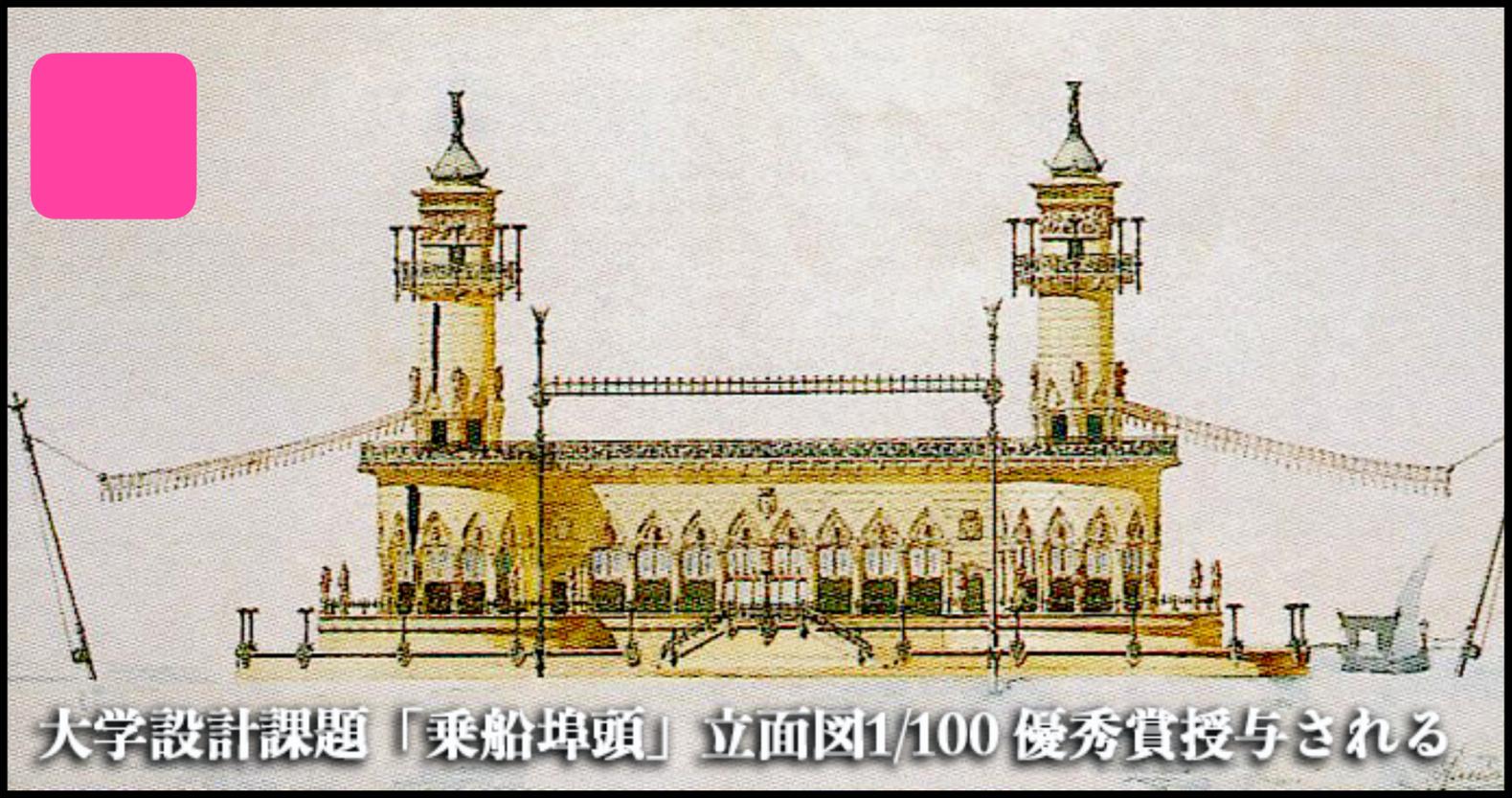
○ ガウディは幼少年時代に、レウスのエスコラビオス会で初等教育を受け、レウス郊外リウドムスにある**父親の夏の別荘で、カタルーニャの緑豊かな自然とともに過ごした**。クルミの木の群落を見つ青臭い果肉つぶすと、手のひらの穀が硬かったのを覚えている。さらに、**アーモンドとブドウ**が植えつけられたその周囲を乾いたオリーブの木々を取り巻く。

①-2・1852-1877年・(0~25年)

建築家の夢の実現へ



ガウディの優れた資質を見抜いた父親は、息子の将来に賭けて、生まれ故郷レウスから、たくましく成長する都市バルセロナに移住する。そこで建築学校に入学し、建築家の夢へ第一歩をしるすことになる。



○バルセロナ建築高等技術学校（カタルーニャ工科大学バルセロナ建築大学）の子科に入学。母親、姉たち、医学を志していた兄フランシスコは、いずれも早世している。廃墟となっていたボブレット修道院の修復再生計画で、ガウディは中学時代の同級生であったトダやりベラとともに、建築についてまどめていた。

①-3・1852-1877年・(0~25年)

バロセロナ建築の時代背景

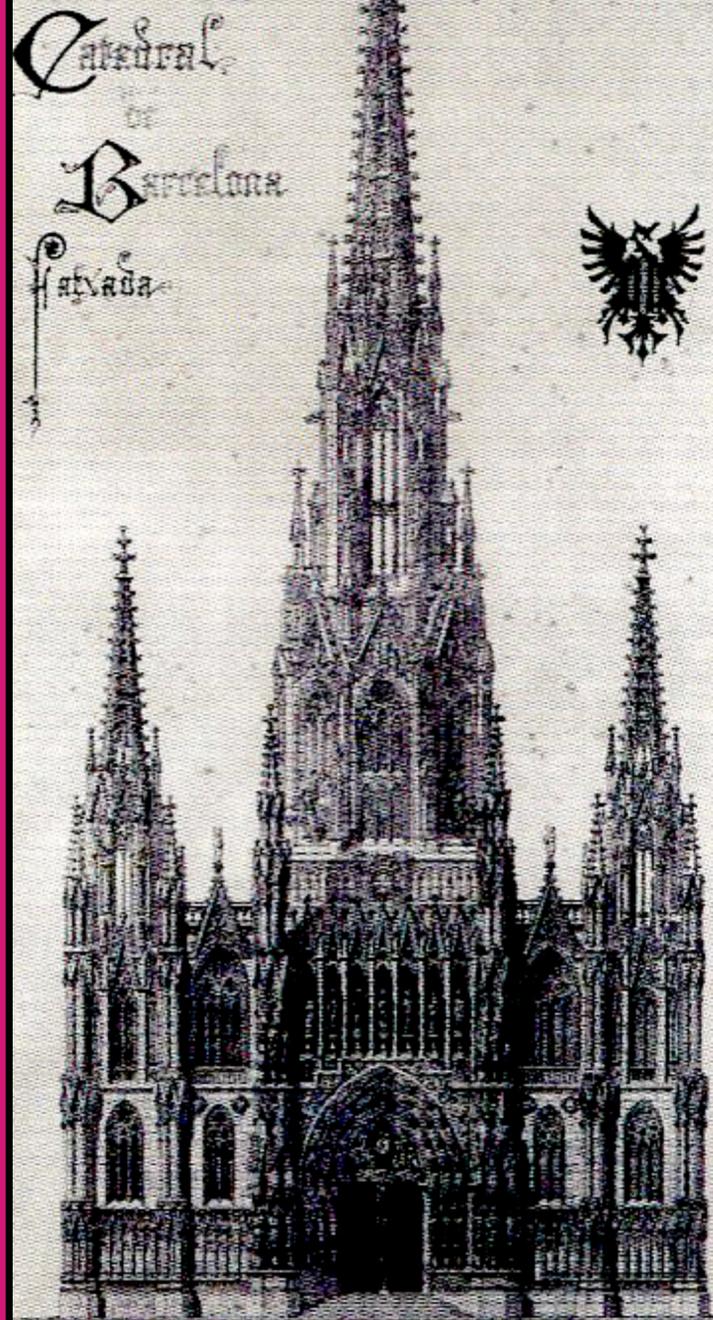


○ 18世紀後半の**インディアース**たちによる富の蓄積とともに、カタルーニヤ的なるものへの希求、民族としての文化的再生への熱情が一気に燃え上がる。砂糖などを仲立ちとするスペイン語圏や他のヨーロッパ諸国との貿易が富をもたらし、**綿紡績業は発展**し、19世紀になって導入された**産業革命**がこれに拍車をかける。**鑄鉄技術の伝播から鉄道の出現に至る、機械による活発な生産手段の変革**を通して、人々の生活形態も急激に変わっていく。

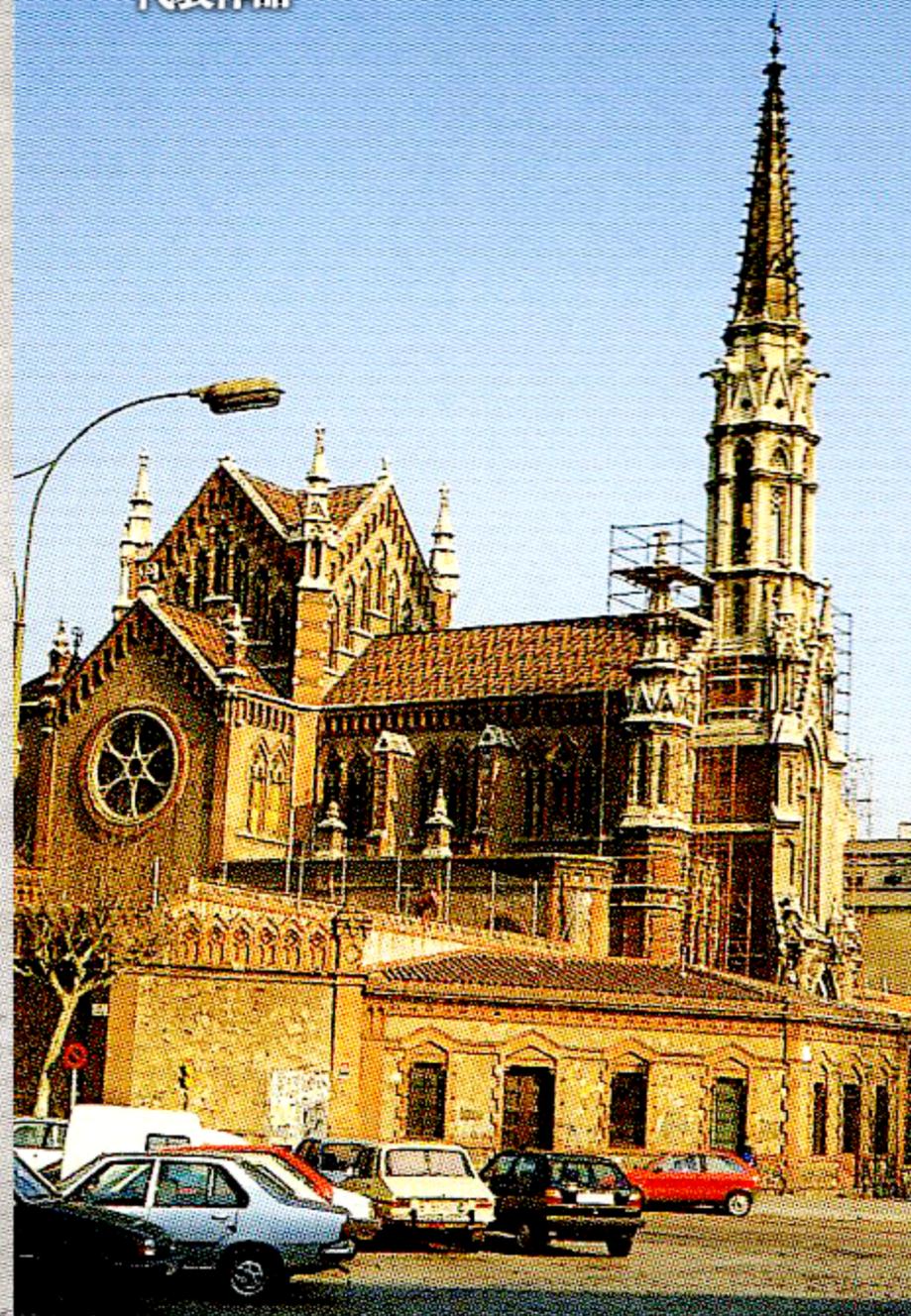


②-1・1878-1902年・(26~50年)

バルセロナ大聖堂ファサードの設計競技においてガウディが作成した図面



ジュアン・マルトレイによるサレザス教会鐘塔。ラナジャンサにおける新中世主義の代表作品



建築家マルトレイとの出会い

フランシスコ サレジオ教会

サレジオ教会 (1882~85年/(30~33歳))

○ **建築の師マルトレイ**・・・ガウディは**バルセロナ建築高等技術学校 (バルセロナ建築大学)**を卒業するとともに、1878年に建築家の資格を取得した。この前後に建築家ビリヤール、技術者サレマレリヤ、建設工匠フンサレーらのもとの働くなかで、**彼の人格形成に大きな影響を与えた一人の建築家との出会いを忘れてはならない。**カタルーニヤ新中世主義を代表する建築家とされ、中世ゴシックに傾倒し、数多くの宗教建築を手掛けた。

○ **マルトレイの名声によって**、ガウディはバルセロナ市庁からライアル広場やバルセロナ埠頭の公道に設ける枝付きガス煙の設計依頼を受ける幸運に恵まれた。さまざまな**宗団やコミーリヤス侯爵家**などとの幅広い交友も築くようになる。建築家として生活し始めたころ、**マルトレイの存在はガウディにとって、決定的な位置を占めていた。**

②-2・1878-1903年・(26~51年)

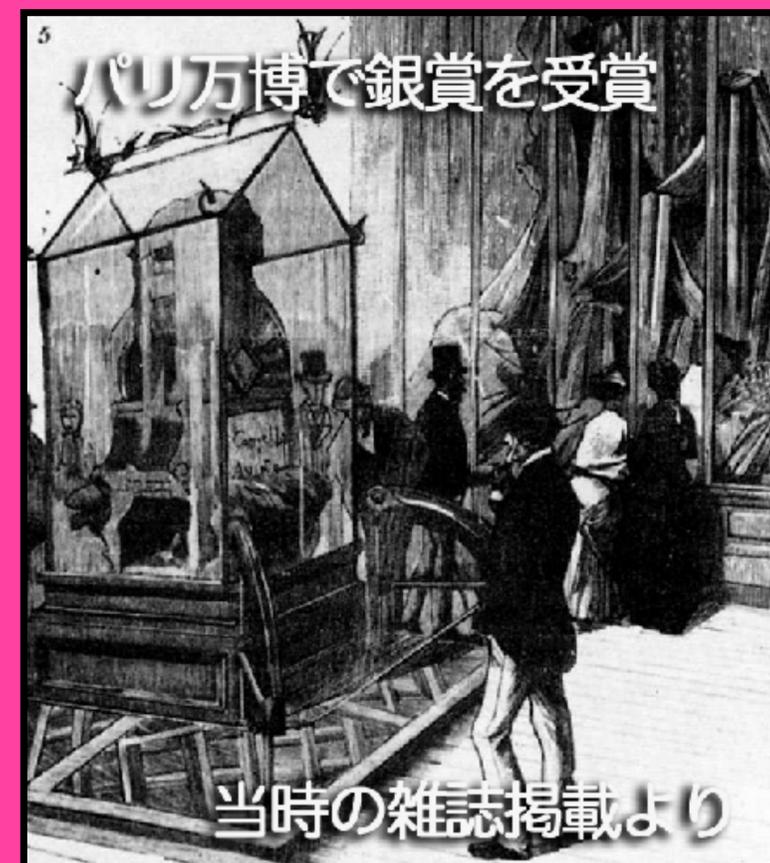
運命を決定づけるパトロン、グエイとの出会い

建築家としてのガウディの運命を決定づけるエポックであった。青年期にさまざまな小品を制作したプンティー工房。

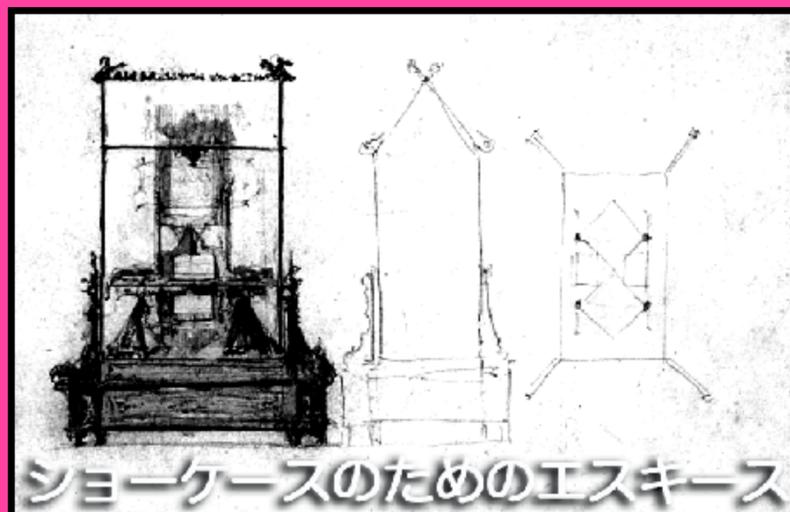
中央にガウディ、右にプンティー、二人の間に後のサクラダ・ファミリアの彫刻制作主任となるヨレンス・マタマラ



《アントニ・ガウディ肖像写真》
1878年(26歳)年、リウズ市博物館蔵



当時の雑誌掲載より



○ **グエイとの初めての出会い**・・・**パリ万博(1878・26歳)**で栄誉も受けたこのショーケースに魅了された来館者の一人が、**アウゼビ・グエイ**だった。バルセロナに戻り、クマリヤからこの作者がガウディであることを知ったグエイは、義父コミーリヤス侯爵のための家具のデザイン依頼を兼ねてプンティー工房を訪ねた。**これが二人の初めての出会いである**。ショーケースは小品とはいえ、いかなる微細な部分もおろそかにしない**ガウディの制作態度が結晶化した、洗練された作品の萌芽**といえる。グエイの明敏なヴィジョンは、このなかにガウディの優れた**建築的ヴィジョンを洞察**したのである。

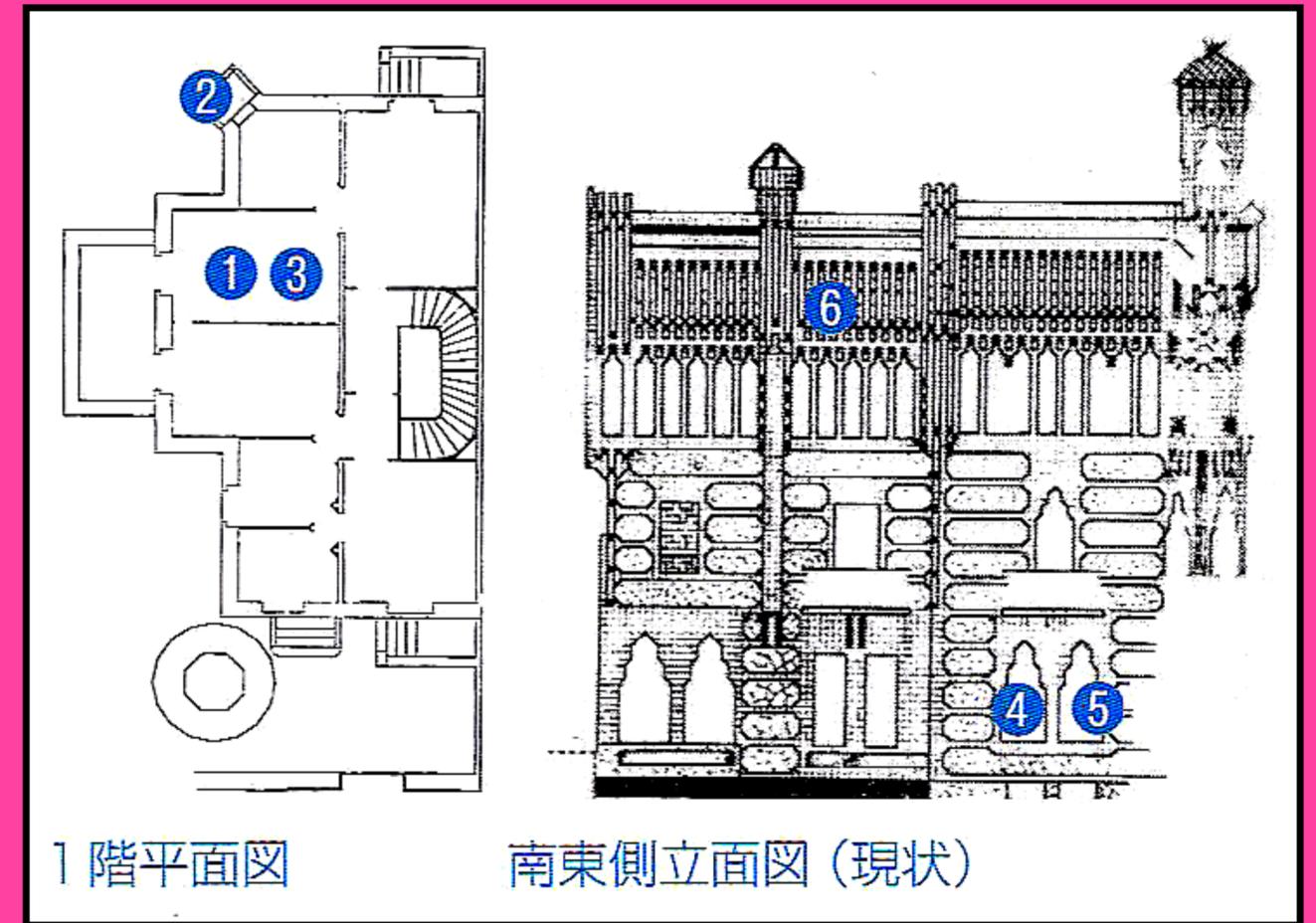
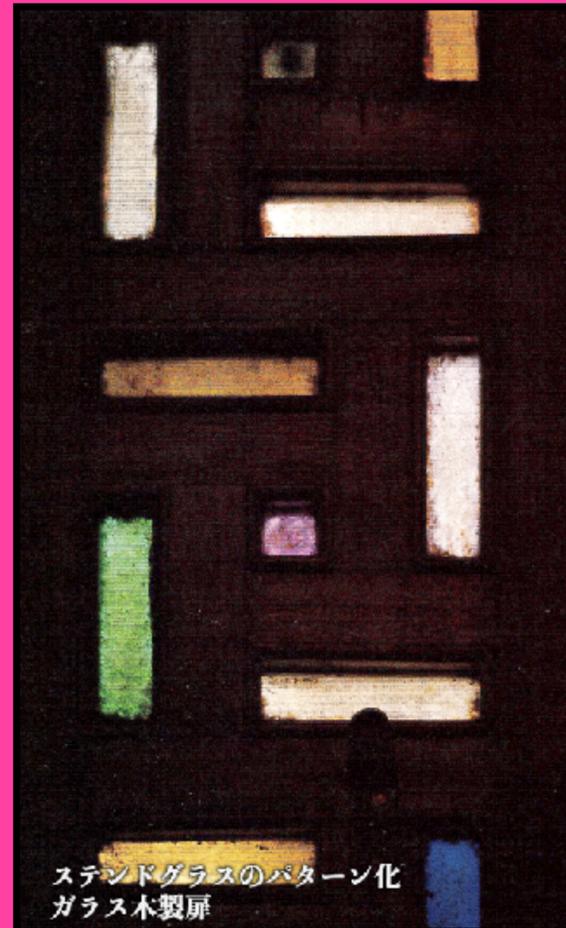
○ **26歳になったガウディ**は、最高の施主であり、その生涯において **最高の理解者となる青年実業家アウゼビ・グエイ**に出会った。それは、**建築家としてのガウディの運命を決定づけるエポック**であった。

②-3・1878-85年・(26~33年)

カザ・ビセンス



色彩と植物の造形が生き生きした外観を作る



○ムデハル様式の外観・・・この作品は、旧市街から距離をおいたグラシアに位置する、都市郊外的な性格を有した住宅として意図された。庭園には、塀と一体で構想された歩廊付きの滝が流れるパビリオン(東屋)を設計していることからもうかがい知れる。施主のタイル業者マヌエル・ビセンスから、どのような経緯で依頼があったのかは定かではないが、ガウディからすれば《カザ・ビセンス》は、彼の色彩理論の具体化であり、造形がその主題であったといえよう。

②-4・1883-85年・(26~34年)

別荘・エル・カプリチョ

陽光を求めるスペイン北部の夏の別荘

1

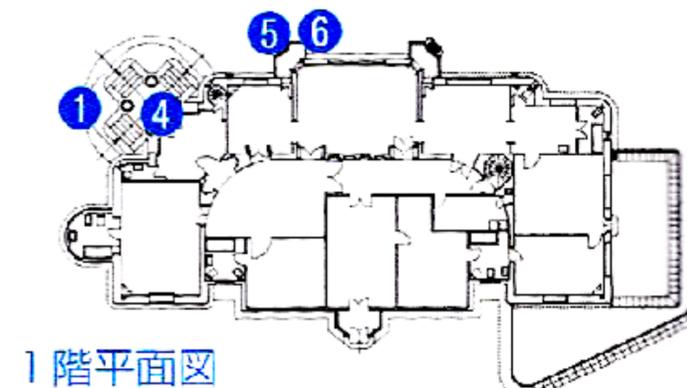
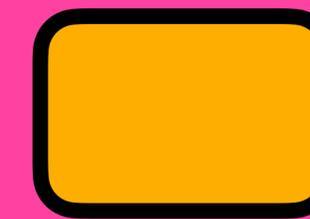
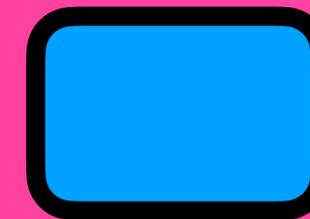


別荘エル・カプリチョ

2

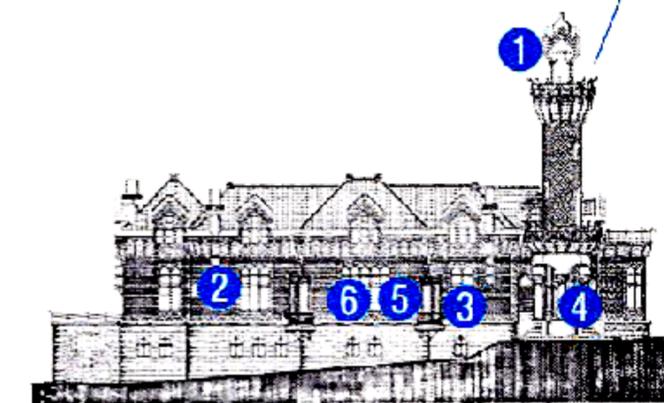


外壁面の部分、レンガ積みの外壁をひまわりの花と葉のレリーフ状のタイルが区切っている。



1階平面図

ミナレット



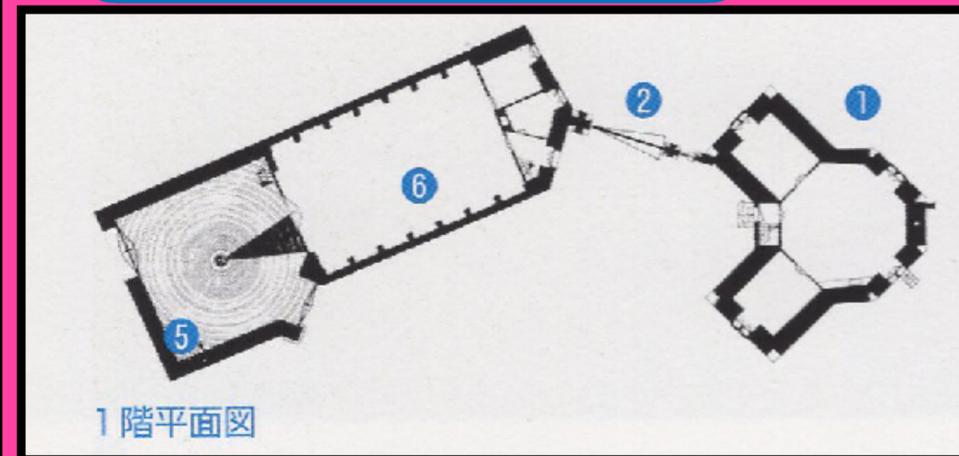
正面(北側)立面図

○ひまわりのタイルが施された望楼(ぼうろう)・・・《別荘エル・カプリチョ》は、コミーリヤス家の初代侯爵アントニオ・ロペス・イ・ロペスの親戚(義姉妹の夫)に当たるドン・マクシモ・デ・ディアス・キハーノによって依頼された夏の家である。ガウディは、マルトレイの設計になるロペスの霊廟・教会(1878~81)の家具デザインを、彼の娘婿である実業家のアウゼビ・グエイを通じて担当したが、この関係を踏襲する形での依頼であった。外観は、玄関ポーチの上に伸びる望楼を兼ねた塔が全体を象徴している。イスラム建築のミナレット(礼拝堂モスクを構成する高塔)を思わせる表現が歴史様式の影響をうかがわせるが、一方で、建物全体の色調は、この土地の風景に見られる澄み切った緑の色ともよく調和している。

②-5・1884-1887年・(26~27年歳)

建築家としての才能が試された邸宅

グエイ別邸リンク

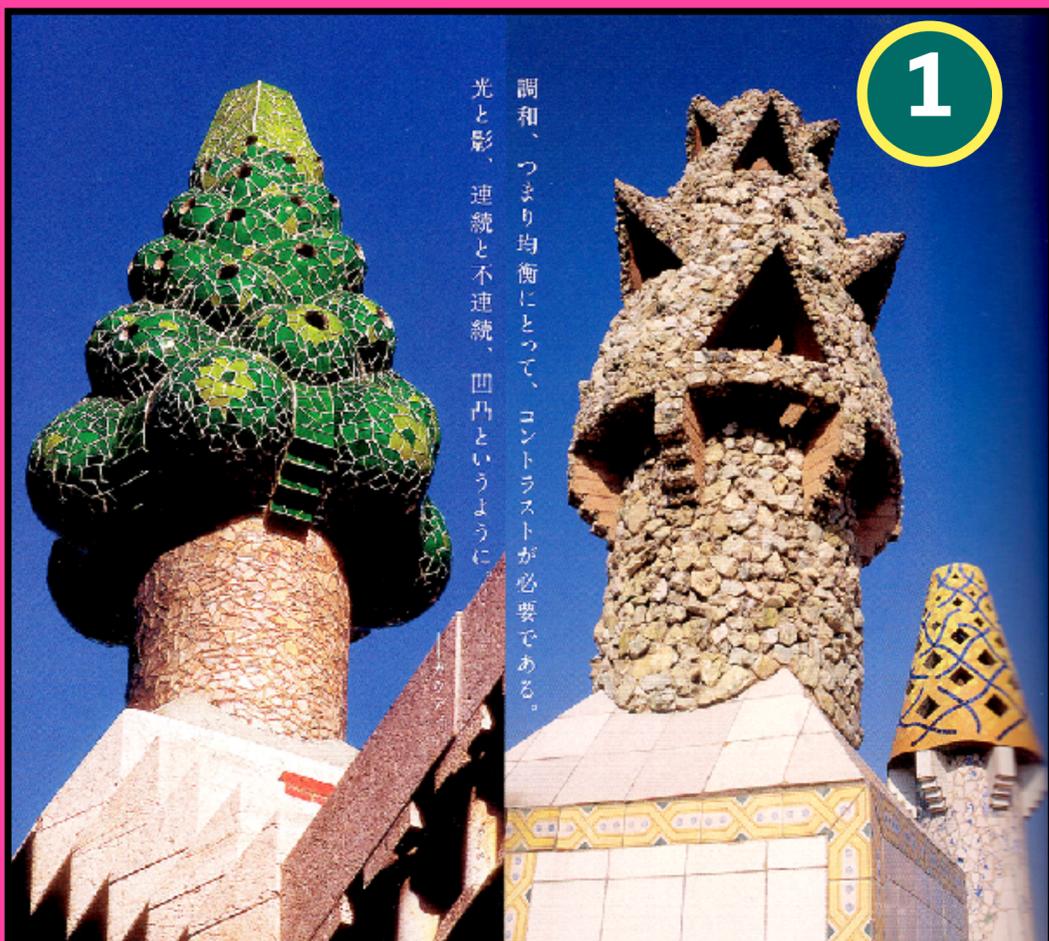


○(細部をおろそかにしない制作態度)・・・この扉を支えるレンガの柱は、赤みの強いものと黄色みがかかったものが交互に積層されており、目地にモルタルが充てん填される。あるとき、粕薬のかかっていないレンガの門柱が陽光に輝いた。そんなはずはないとあらためて仕上げ面を見ると、ガウディはこの数ミリの間隙に、粕薬のかかったタイルの破片を、蝶細(貝殻の薄片をはめ込み、貼りつけて装飾する工芸技法)のごとく丹念に埋め込んでいた。タイルを砕いてその破片を貼るカタルーニヤの伝統工法(トレンカディス)をここで応用したのである。どんな細部にもガウディの目配りがないところはない、あるいは、どのような細部もおろそかにすることのない、彼の制作態度の一端を示すものだろう。

《グエイ別邸》は、馬丁兼管理人の家と厩舎・調教舎の二つの建物によって構成され、それらを鍛鉄(鍛えた鉄)および鑄鉄製の鎖でつながれた龍の入口扉が隔てている。これが、今や著名な"パドラルベスの龍"として知られる鉄扉で、レンガ造の門柱の片側に取り付けられている。

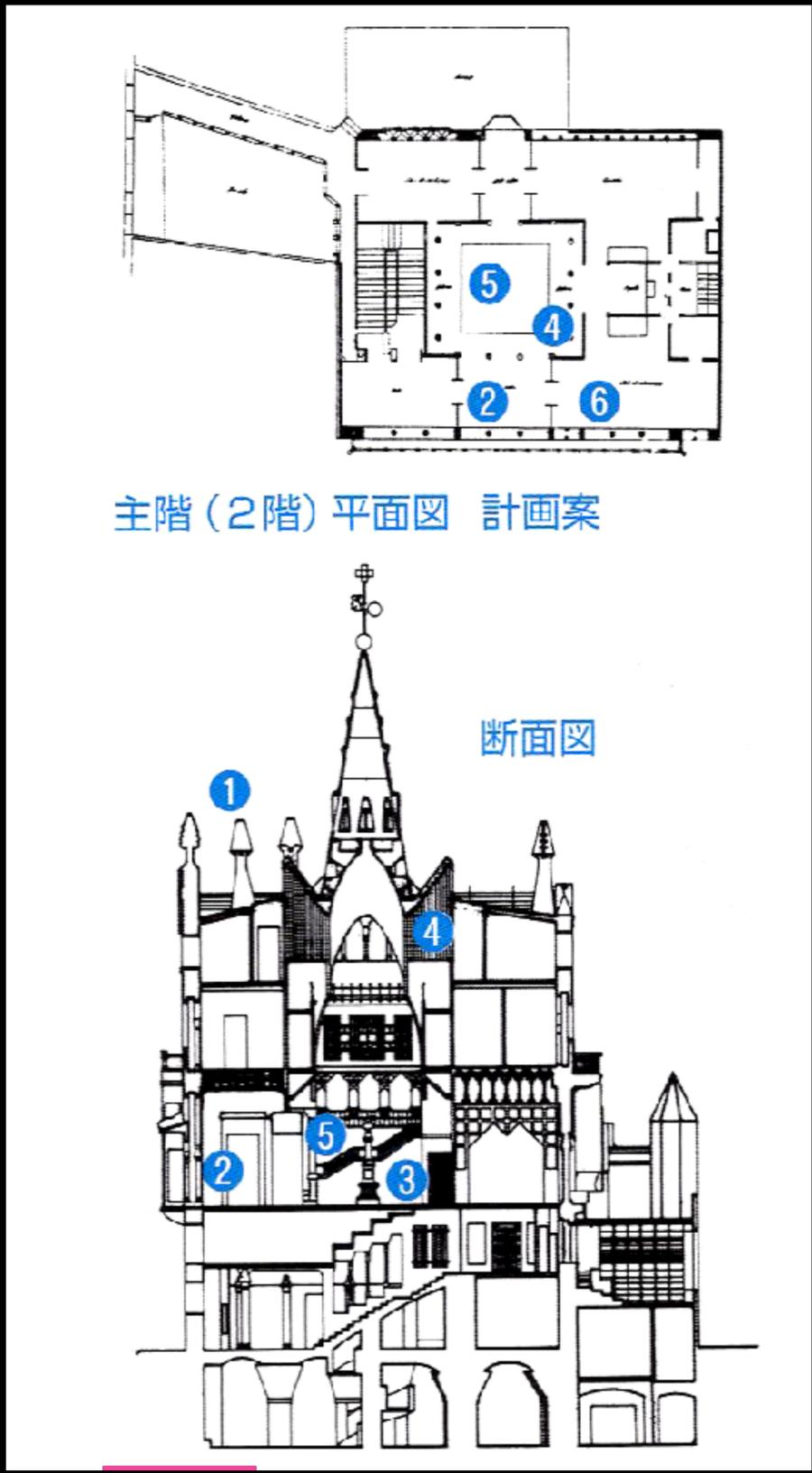
②-6・1886-1889年・(34~37歳)

さまざまな建築的試みを投入した初期の代表作



1

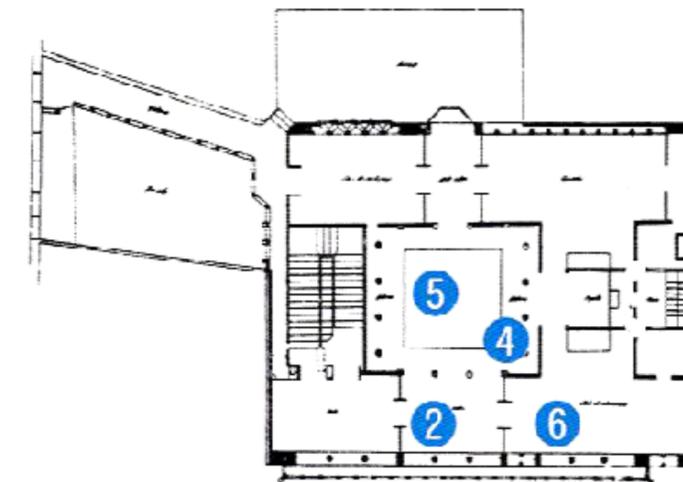
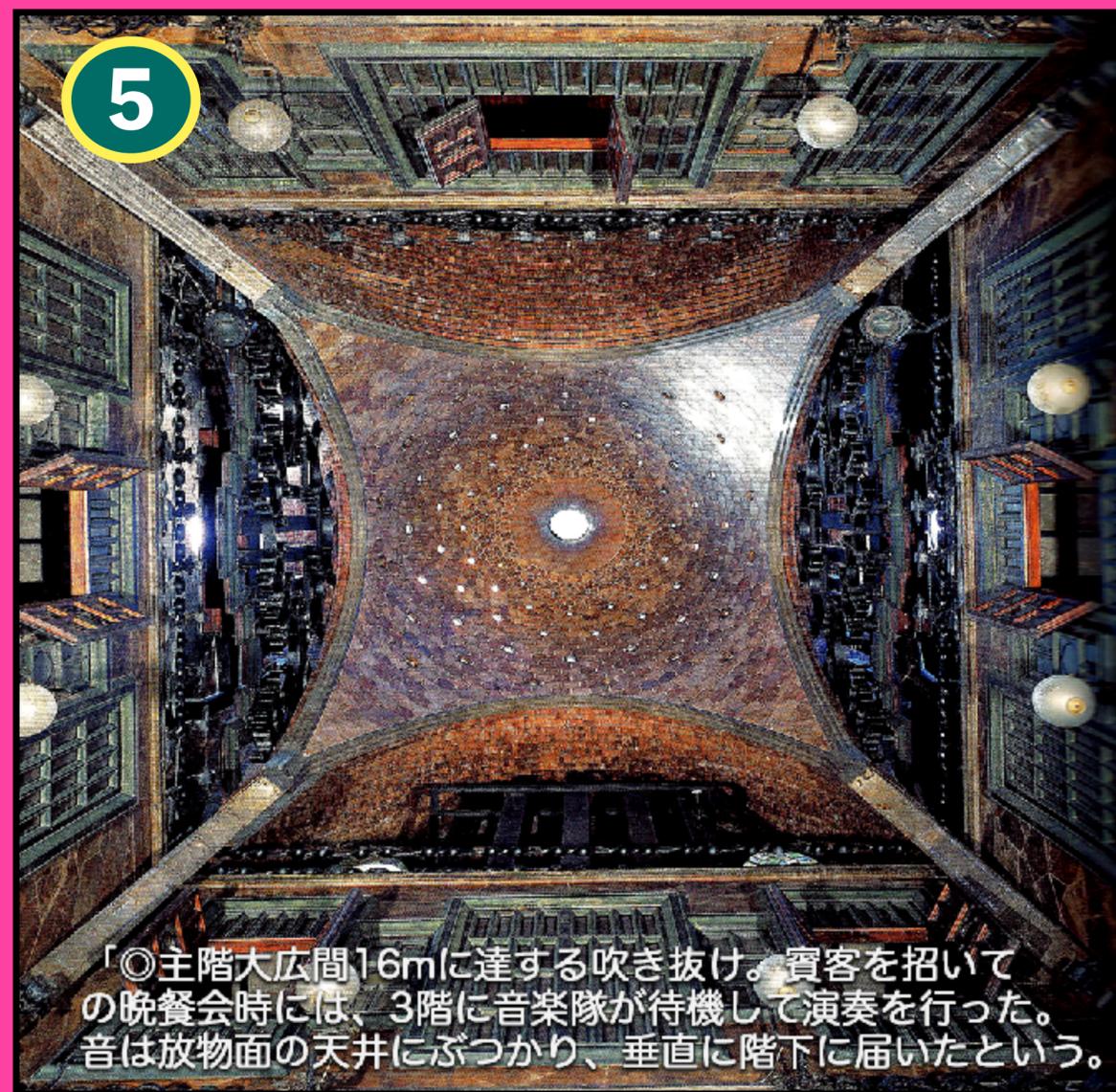
グエイ(ル)邸



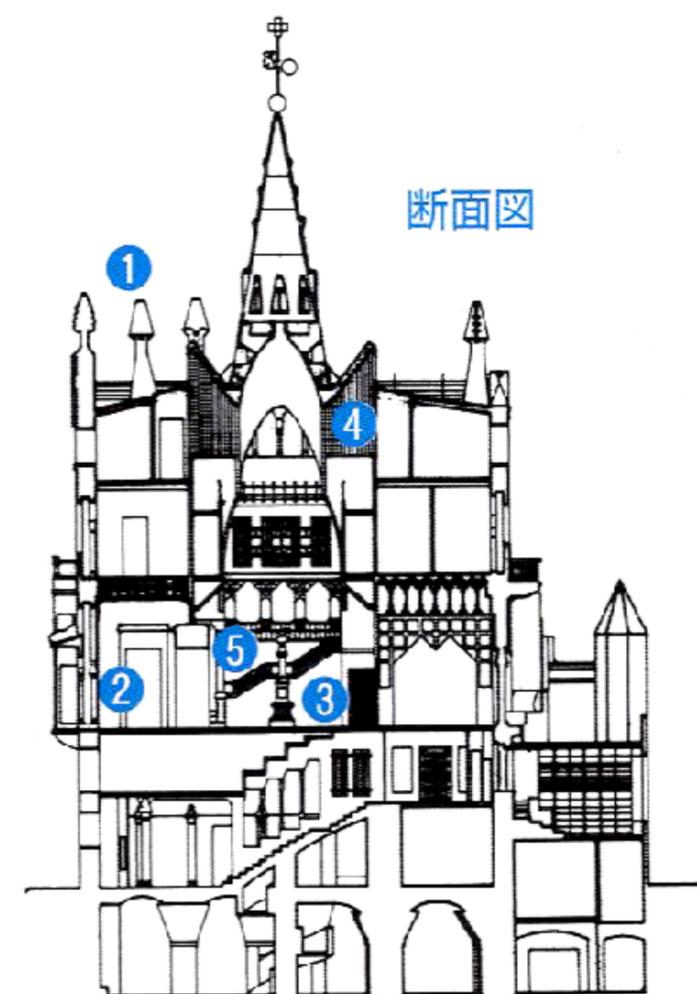
○創造力を思いのままに駆使・・・アウゼビ・グエイが、事前に《グエイ別邸》でガウディの力量をつぶさに感得し、父親のランプラスの地所に繋がる敷地に**自邸の設計を依頼**したのが《**グエイ邸**》である。ガウディは自らの建築的能力のすべてをこの仕事に傾けたことは、ファサードのデザインのために20枚以上の案を提示したことからもうかがえる。そこから二つの案を、グエイの選択にゆだねた。真に新しいものを求めるグエイの精神は、玄関のスケッチから放物線アーチの方を選んだ。グエイの母方の家系となるバシガルーピ家がイタリア出身であったことから、ガウディはぬかりなく、ヴェネツィア風の荘厳な邸宅を範としてファサードを設計し、玄関の開口部をグエイが選んだ放物線形態の二連のアーチとした。ガウディは創造力を思いのままに駆使し、さまざまな建築的試みをこの作品に投入していく。

②-6・1886-1889年・(34~37歳)

さまざまな建築的試みを投入した初期の代表作



主階(2階) 平面図 計画案



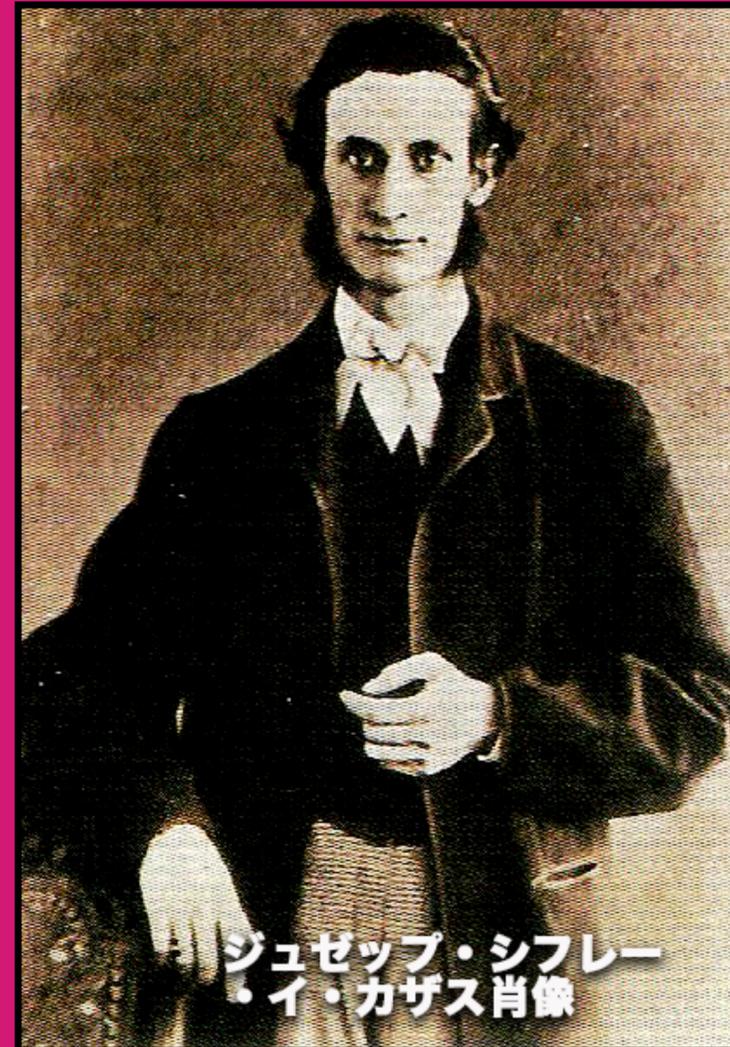
断面図

○1888年のバルセロナ万博の折、アメリカの大統領グラヴァー・クリーブランドを迎えてのパーティーが催されたが、当代の代表的な人物であった施主グエイの期待に、この作品は充分応えることができたのである。また、学術探訪カタルーニヤ自治主義者協会が主催するガウディ見学会は多くの時間を要する。そのことは、この作品の建築的密度の高さを示している。ガウディの初期の代表作といえる。



アントニオ・ロペス肖像

○ジュセップ・シフレー・イ・カザス (1777~1856)・・・バルセロナの北の小さな港町アレニス・タ・マール生まれで、ハバナ、後にニューヨークに居住して、キューバ産の皮革や、その他の産物をアメリカやヨーロッパに輸出することで資産を得る。19世紀初めごろ、キューバの町々で畜殺された牛すべての皮革の独占権を獲得し、19世紀半ばまで権利を保持したといわれる。そのころ、バルセロナの港近くの敷地に壮麗な住宅シフレー一部を建設している。市内に複数の不動産を所有し、1852年に支払った固定資産税はバルセロナ市の支払い額を超え、貴族階級の支払い額もはるかに凌ぐものだったという。

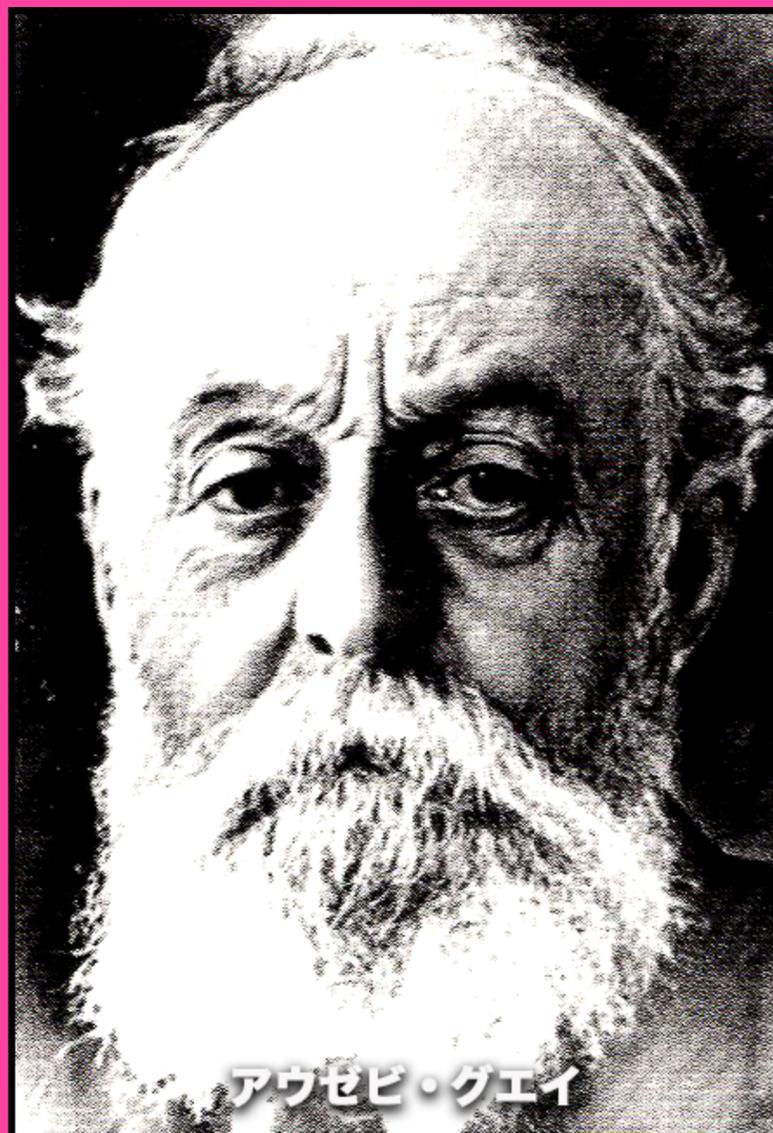


ジュセップ・シフレー・イ・カザス肖像

○アントニオ・ロペス (1817~1883)・・・カタルーニャではなく、サンタンデル県コミーリヤス出身であるが、娘がジュアンプエイの息子でガウディのパトロンであるアウゼビに嫁ぐことで、クエイ家と縁戚関係となり、バルセロナに深くかかわっていくことになる。サンティアゴ・デ・クーバに運び込まれた奴隷をハバナなどの製糖所に輸送し、買い値の数倍で売却することや、経営する大西洋横断会社の船で大量の兵士や物資をキューバへ運ぶ独占契約を国との間で結び、莫大な利益と資産を築いた。さらに、第一次キューバ戦争終了後、国家への貢献が大であるとしてコミーリヤスの侯爵に、さらに1881年には大貴族に列せられた。

②-8・1886-1889年・(34~37歳)

バルセロナの近代化に貢献したグエイ家の人々

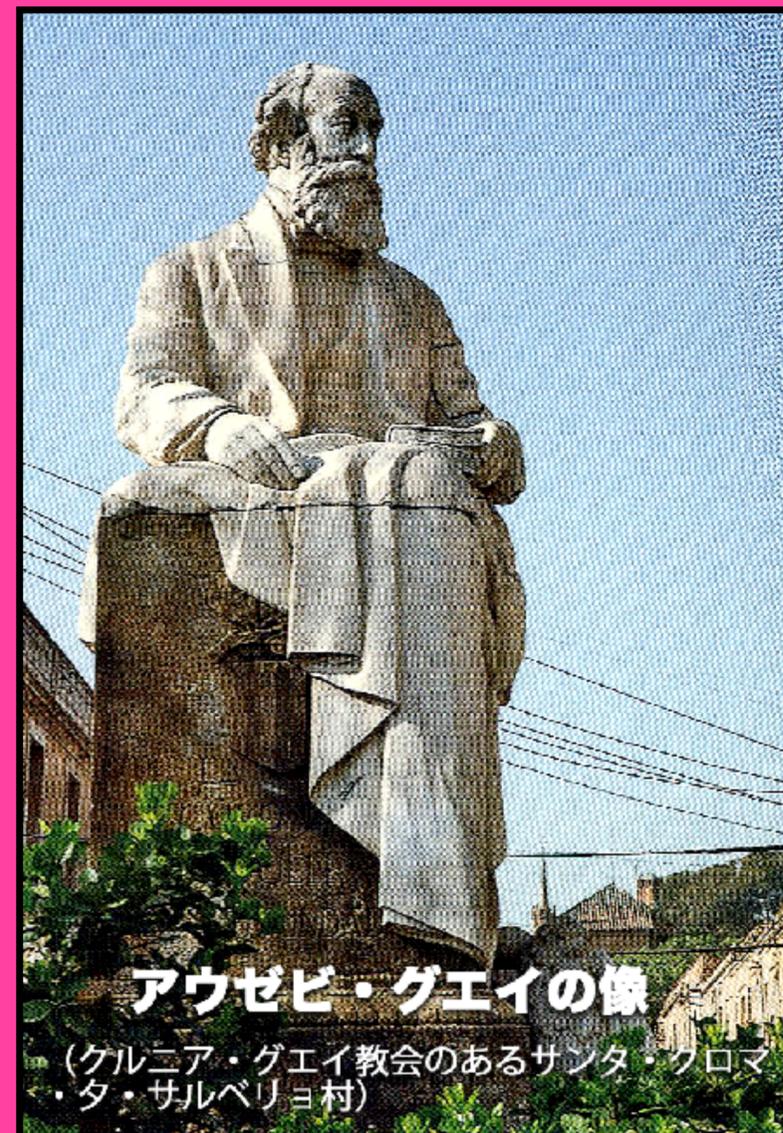


アントニ・ガウディ



ガウディ グエイ

1910年、クルニア・グエイ教会を訪問した際のガウディ(左から2人目)とグエイ(中央)。



アウゼビ・グエイの像

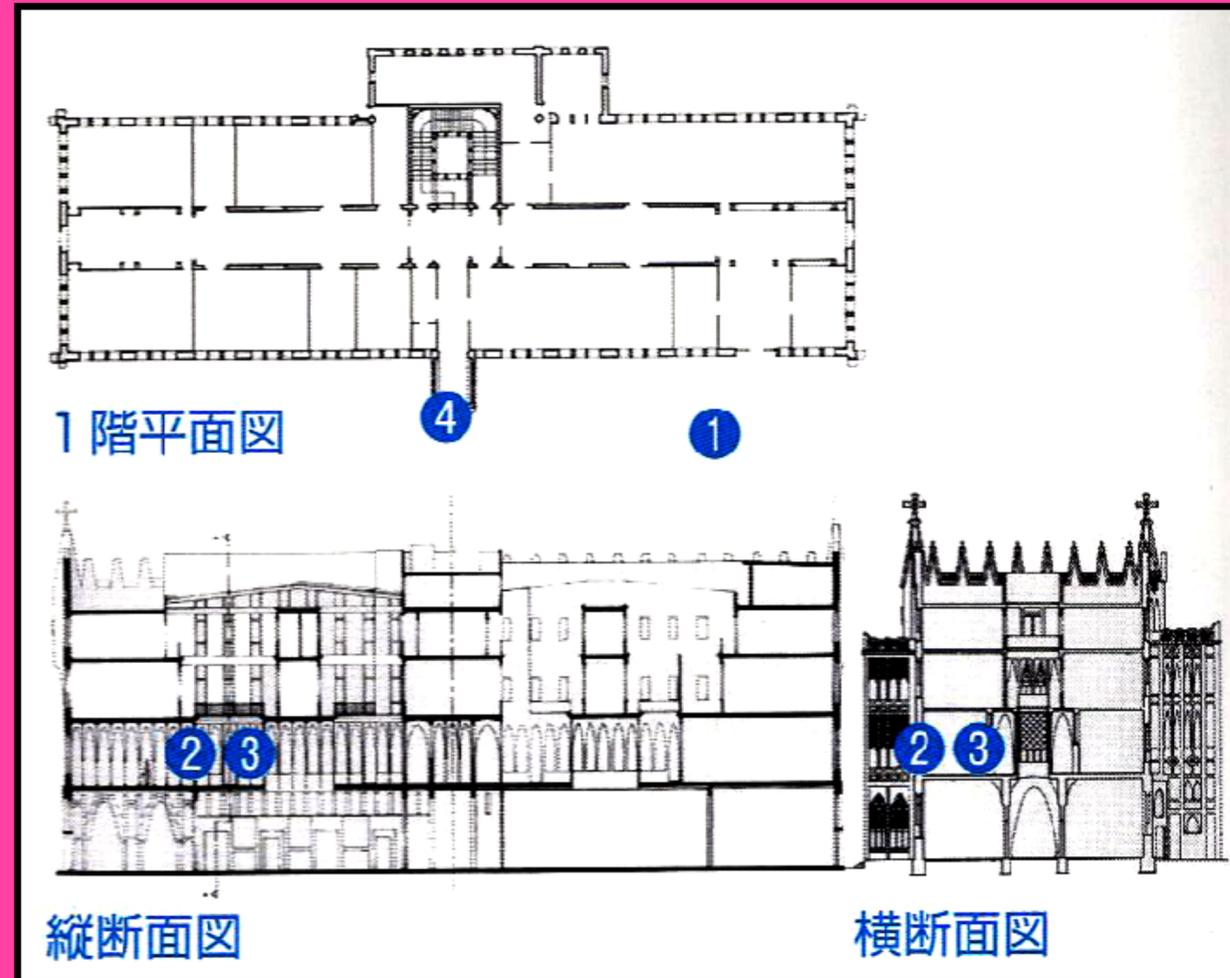
(クルニア・グエイ教会のあるサンタ・クロマ・タ・サルベリヨ村)



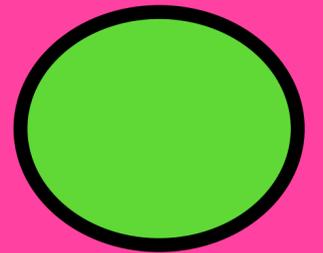
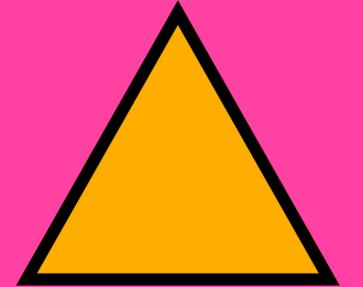
○ **ジュアン・グエイ・イ・ファレー**・・・19世紀最初の四半世紀にキューバの事業を清算し、本国に引き揚げる。帰国後、バルセロナではカタルーニヤの工業化を牽引する**繊維工業**に目をつけ、交通インフラの拠点であった**サンツ**に**蒸気機関で動く最初の繊維工場「バポール・ベイ(古い蒸気)を建設**し、コーデロイの生産を始めた。製造業にも進出し、**鋳物工場「ラ・バルセロナサ」**をランブラスに、その後複数の工場と合併し、「**ラ・マキニスタ**」という**スペインを代表する製鉄・機械の大工場へと発展**させる。クレデイト・メルカンテイル銀行、バルセロナ銀行などの経営にもかかわり、幅広く事業を展開して、一代にして**名門グエイ家の基礎**をつくり上げた。

②-9・1888-1890年・(36~38歳)

光によって空間的な深みと無限の遠近感を表現



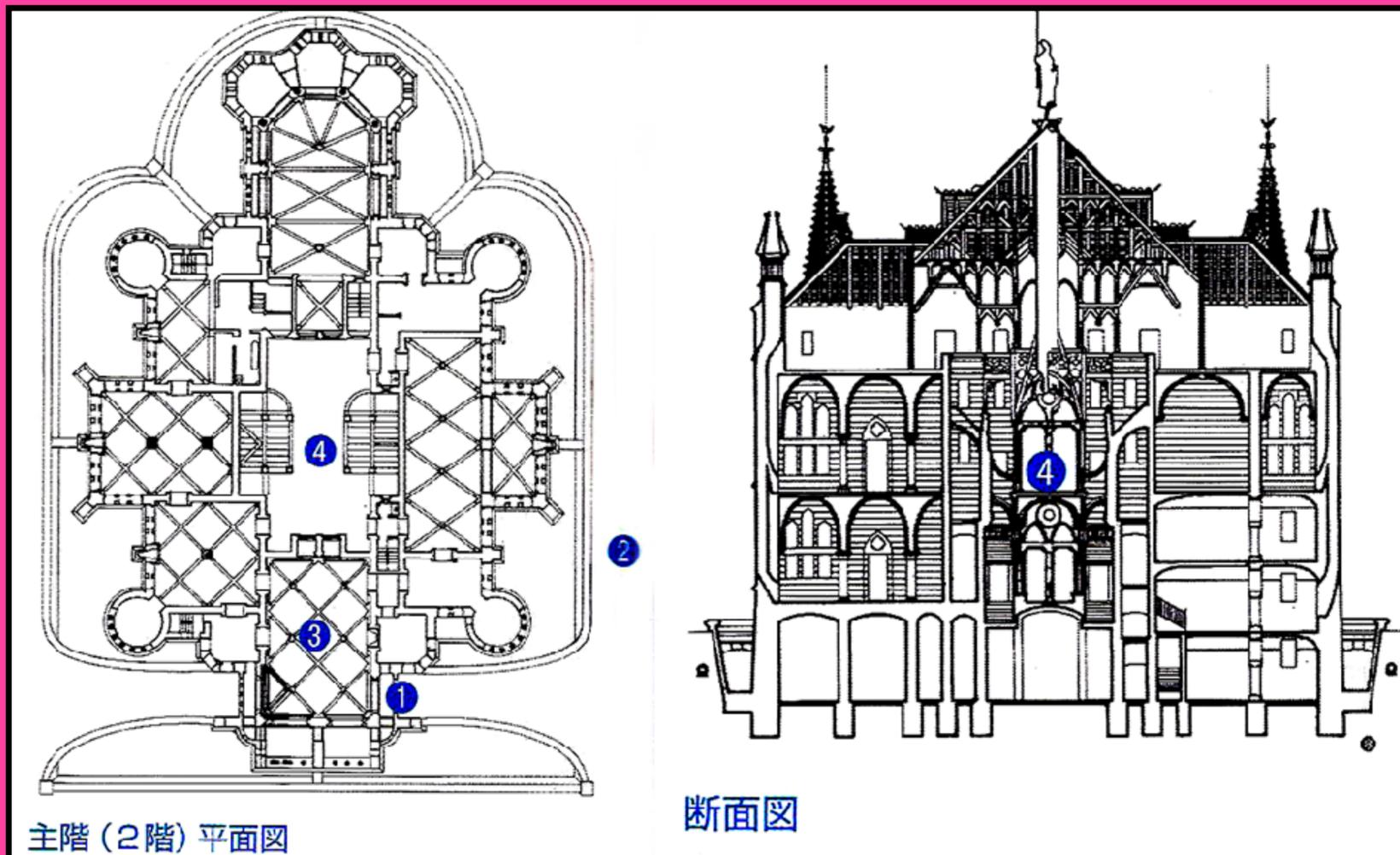
テレジア学院



○ 同郷のグラウ司教を介して知り合ったイエズス聖テレジア女子修道会の創始者アンリック・オツソ・イ・セルリヨ司祭の依頼により、サン・ジェルバシオに設計させた学校建築である。58m×18mの単純な矩形平面を構成しており、切り出された石とレンガによる組積造(そきぞう)の外壁が、四層に分割された内部ヴォリュームを包み込む。ガウディは自らの表現力を、この内部ヴォリュームの中心軸に集中させている。通常、床は間仕切り壁によって支持されるが、そのため廊下の両側に部屋が配される中廊下型の積層建築では、その中央部は常に光の届かない暗部になりがちである。それに対し、ここではスケールの異なる放物線アーチを垂直方向に力学的に組み合わせた。それによって、内部ヴォリュームは下階から上層階に上昇するにつれて縮小することによって中庭をもち、中庭を通して天空からの光が1階の中廊下まで降り注ぐようになっている。ガウディは、2階の廊下を光庭に面した回廊へと変化させた。

②-10・1891-1892年・(39~40歳)

垂直性が強調された壮麗な宗教建築



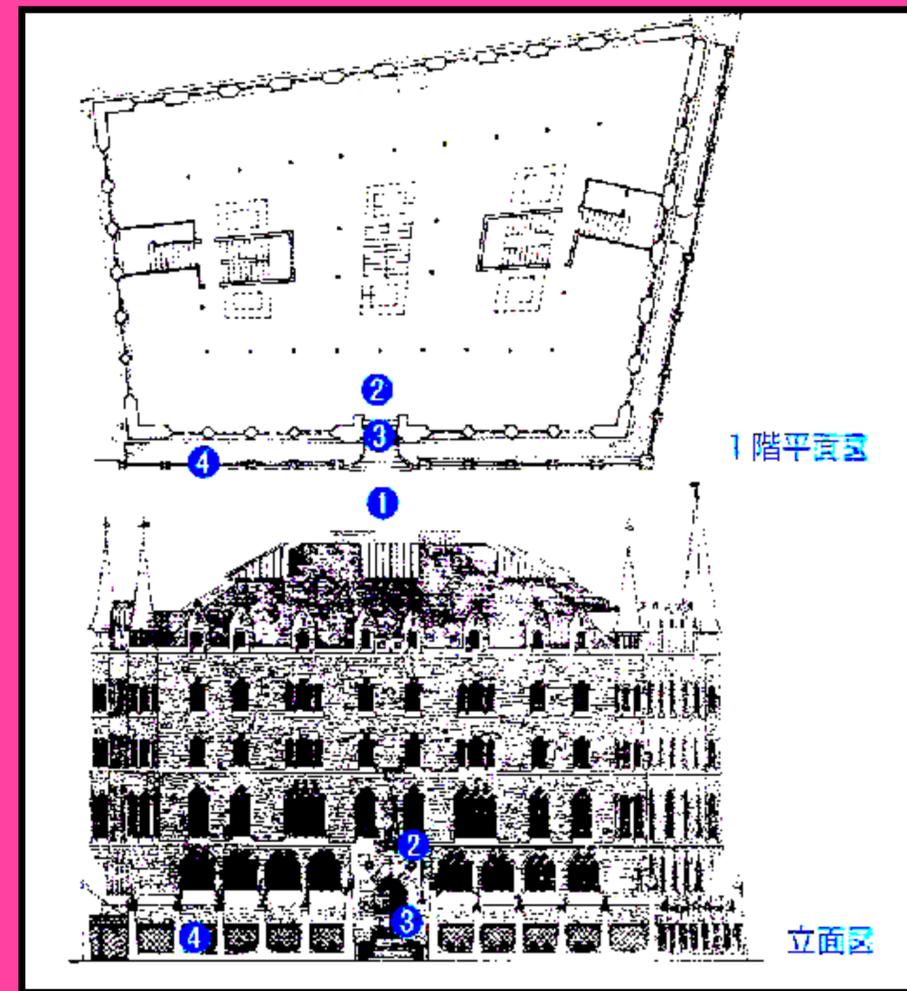
○ **三つの祭壇をもつ礼拝堂**・・・レオン県アストルガに建つ司教館建築は、ガウディと同郷のレウス出身の司教ジュアン・バプティスタ・グラウから依頼されたもので、地階、1階、主階(2階)を介して屋階の各階からなる。この建物の平面は**ギリシャ十字形**で、**南東に正面玄関、北西に配置**されている。アストルガの**司教館本部が火災**によって倒壊した後を受け、再建を手掛けたガウディは、隣接するルネサンス様式の聖堂に見劣りせず、かつ違和感が出ないように配慮している。

②-11・1891-1892年・(39~40歳)

重厚なファサードと軽快なグリルの対比



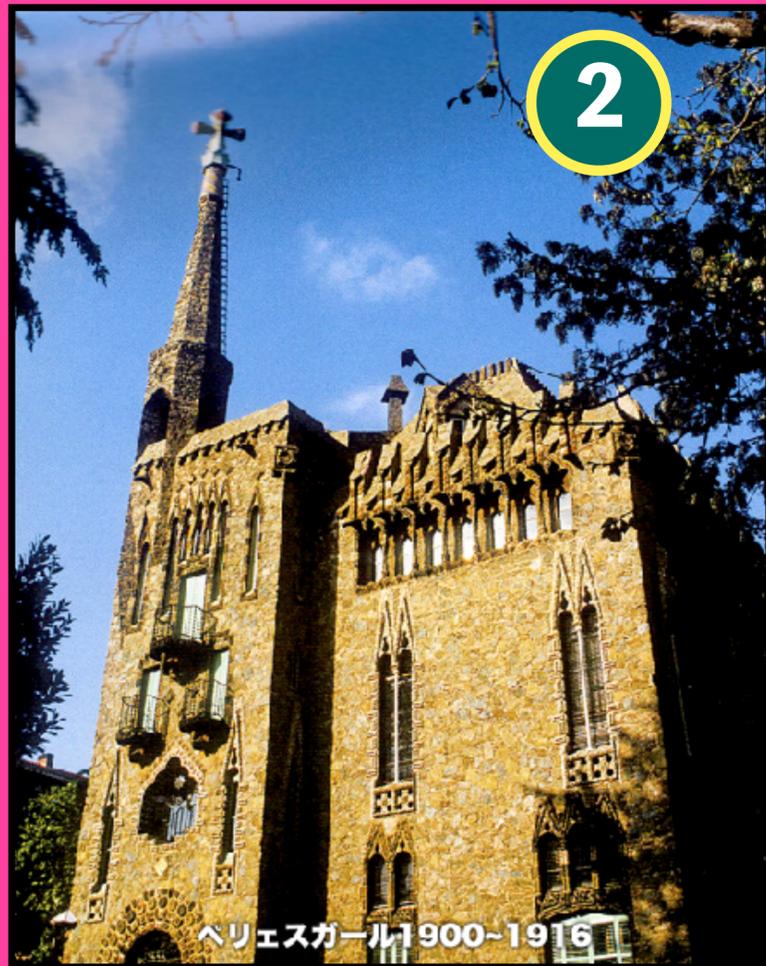
Casa de los Botines



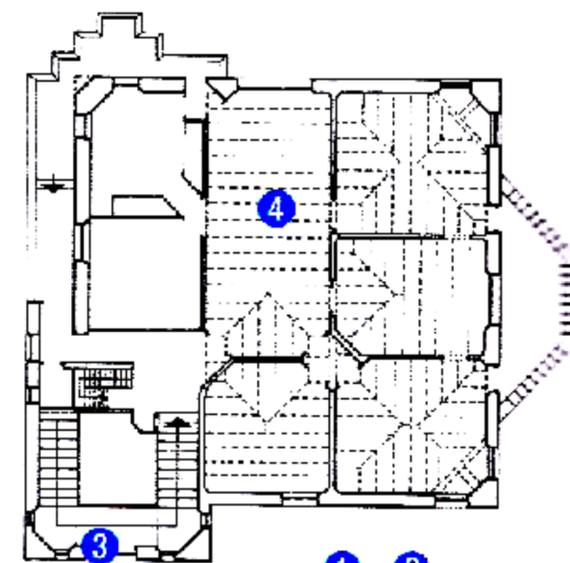
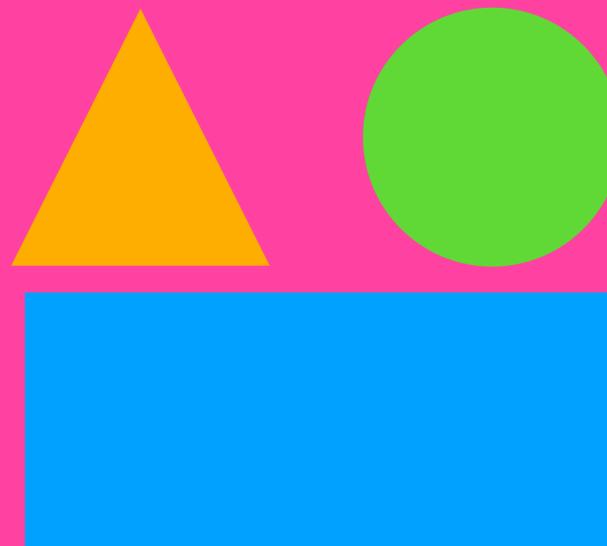
○ 重厚との対比重厚と軽快の対比・・・アストルガと同地方レオン県の県都レオン市にある代表的広場の一つ、サン・マルセロ広場に面して建つ商館併用住宅建築である。カタルーニヤ出身のボティネス家の人々によって営まれるフェルナンデス・イ・アンドレース商会の依頼によって設計された。この建物は、地階と地上4階からなり、地階と1階は建物所有者の経営する商会の営業用事務室に当てられていた。地階は周囲に堀を巡らせており、建物の四隅には北方の城を思わせる塔が建っている。

②-12・1900-1916年・(48~64歳)

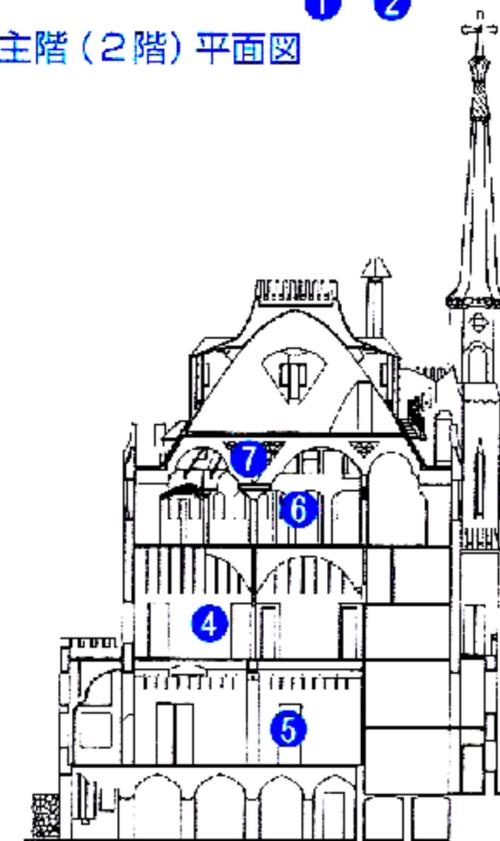
中世ゴシック様式を外観に生かす



ベリエスガール



主階(2階)平面図



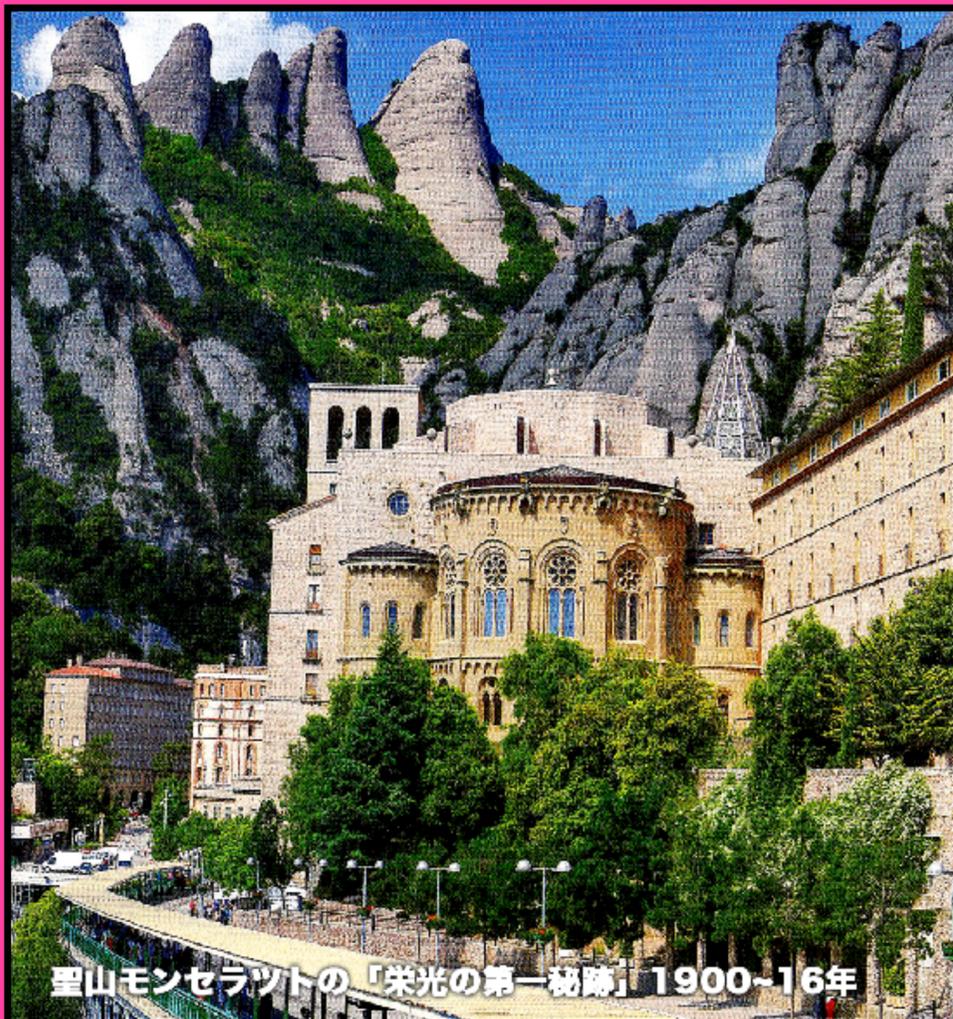
断面図

○ **生き生きとした伝統主義の成果**・・・20世紀初頭、ガウディはバルセロナ郊外に、フィゲラス未亡人マリーア・サゲース・モリンスの邸宅《**ベリエスガール**》を設計する。その外観は**中世の城館のような印象**が深い。なぜこの時代に、この様式を選択しなければならなかったのだろう。ガウディは、この建築を敷地の性格に深く結びつけたかったようだ。《ベリエスガール》は、中世にバルセロナを支配した伯爵たちの邸宅の一つであった。そこからは、実り豊かな平原のかなたに船の出入りする地中海が眺望できた。「**ベリエスガール**」とは「**美しい眺め (bell esguard)**」を意味し、この名前はこの場所の性格に由来する。**カタルーニヤ＝アラゴン朝最後の君主、バルセロナ伯爵のマルティン1世への思い出**にふさわしい様式として、ガウディは**中世ゴシックの様式を城のような外観をもって、この建築のために選択したのである。**

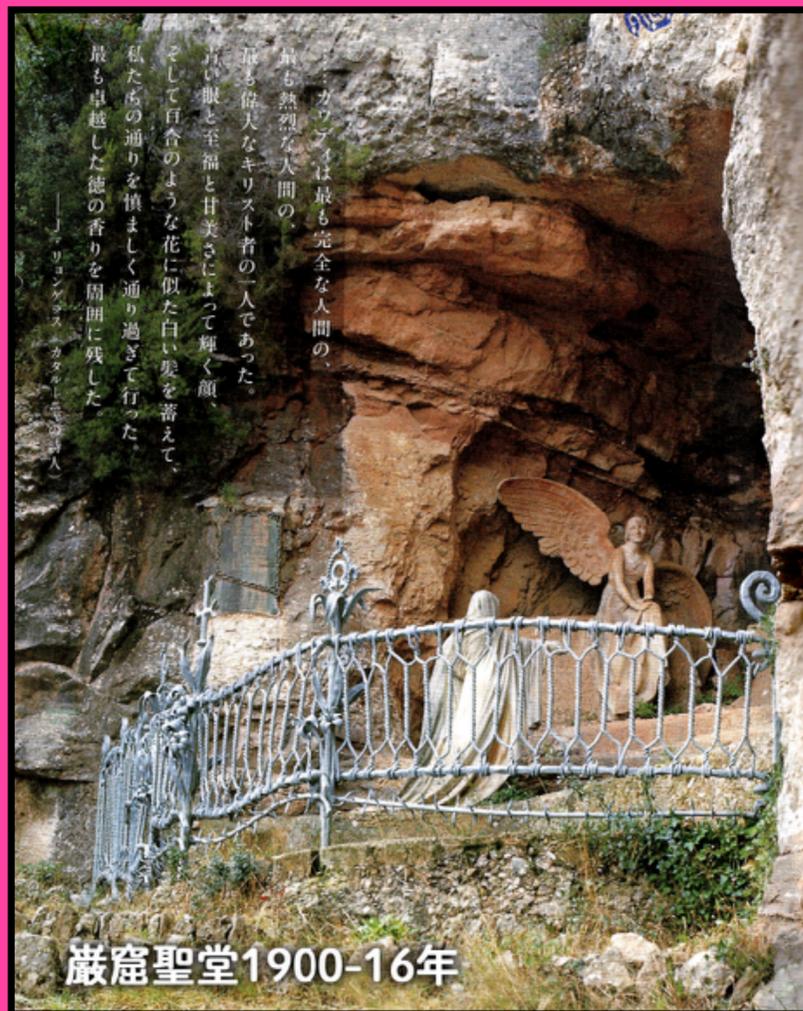
②-13・1900-1916年・(48~64歳)

聖山モンセラットの「栄光の第一秘跡」

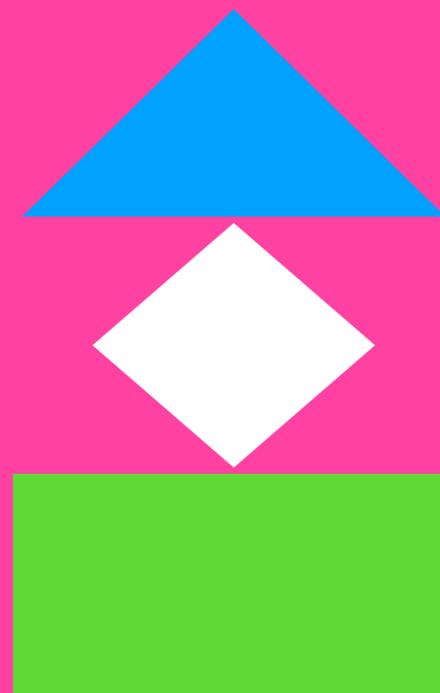
無造作にくりぬかれた巖窟聖堂



聖山モンセラットの「栄光の第一秘跡」1900-16年



巖窟聖堂1900-16年



○ **実現した唯一の構想**・・・カタルーニヤ人にとって信仰の聖地とされている**モンセラット山の中腹に計画**された、いわば自然に抱かれた聖堂である。ガウディは、モンセラット山についていくつかの構想をもっていたようだ。しかし、これらの構想のうち実現したものは、この**《栄光の第一秘跡》**だけであった。それは、**モンセラットの聖母精神同盟**という団体の発意によって実現されたもので、**ロザリオ記念堂のための小規模の仕事**だった。まず、ガウディはダイナマイトで無造作に岩山をくりぬいた。ここを岩窟聖堂とし、彫刻家ジュゼップ・リィモナによる墓と奇跡に驚嘆する三体の MARIA 像を配し、さらに外部の岩壁には一段高いところに復活するキリスト像を据えることで全体をデザインした。

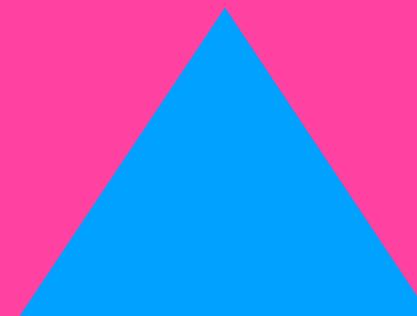
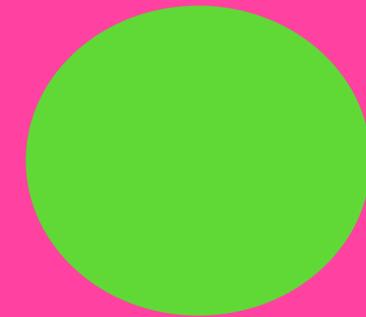
②-14・1902-1914年・(50~62歳)

修復・再生についての創作態度を示す

マヨルカ大聖堂の修復



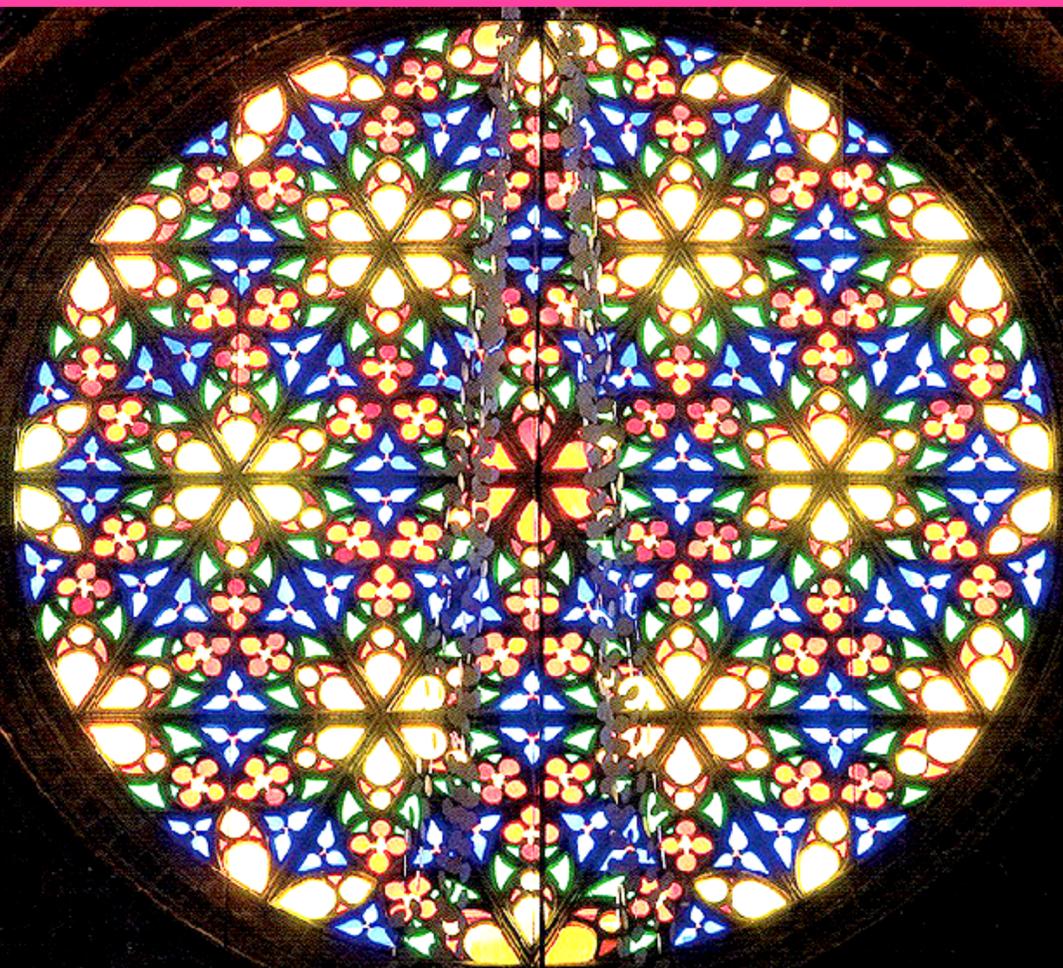
マヨルカ大聖堂の修復



彼の創造精神の中に内在する宗教的詩的感動の
根源を探らずに評価することは
建築家ガウディへの正しい巨大性を見失うものであり、
むしろ僅かしか彼の平面のみを理解するに過ぎない。

—今井兼次（建築家）

マヨルカ大聖堂のステンドグラス1902-1914年



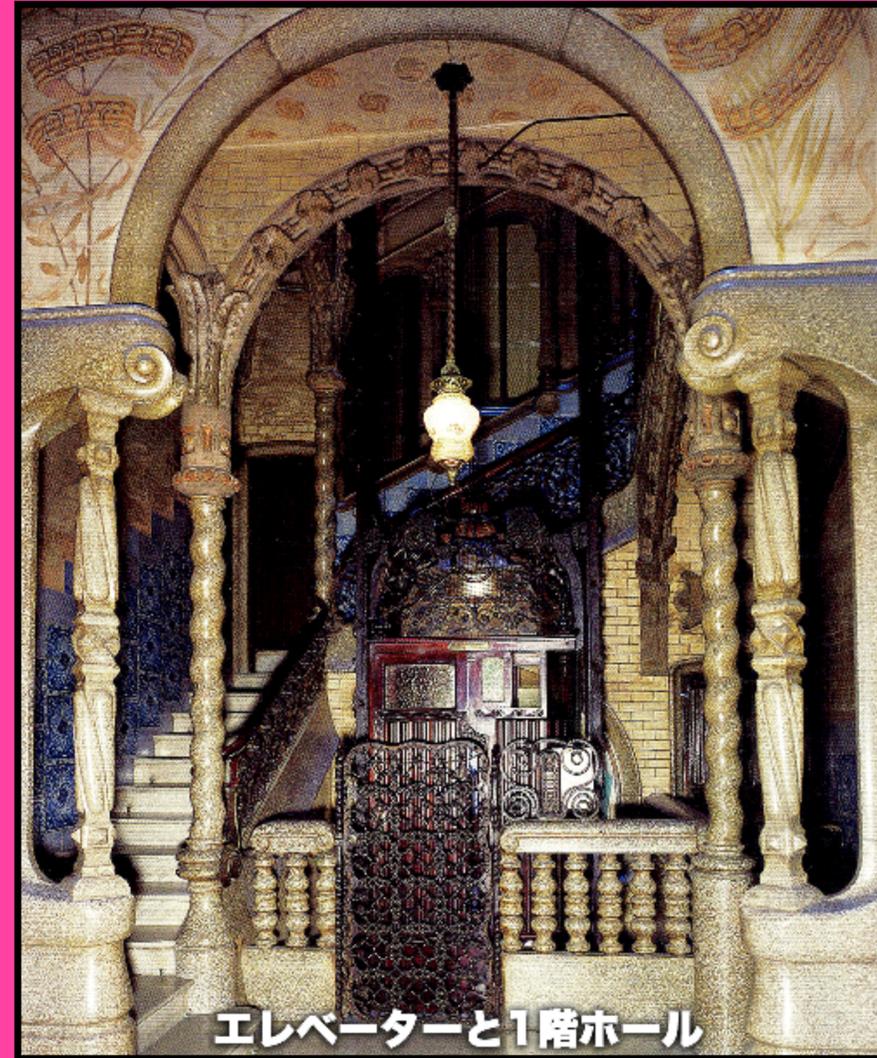
○内部機能の秩序を整える・・・ガウディは、マヨルカ島にあるカタルーニャ・ゴシックを代表する《マヨルカ大聖堂》内部の修復を手掛けた。この作品においてガウディがかかわったのは、要約すれば二つの部分である。一つは、内陣へ聖歌隊席を移し、祭壇の位置を前にもってくる、教会の内部機能の秩序を整える作業である。もう一つは、ガウディの弟子ジュゼップ・マリア・ジュジョールによる聖歌隊席の壁画と、歴代の司教楯の象嵌、大窓、天蓋—シャンデリア、説教台の五箇所デザインであった。大窓のステンドグラスは、三原色の赤、青、黄の組み合わせを少しずつ変化させた三層の色ガラスを用いて実現している。

②-1898-1900年・(46~48歳)

住宅の内外に自然主義的な象徴をあらわす

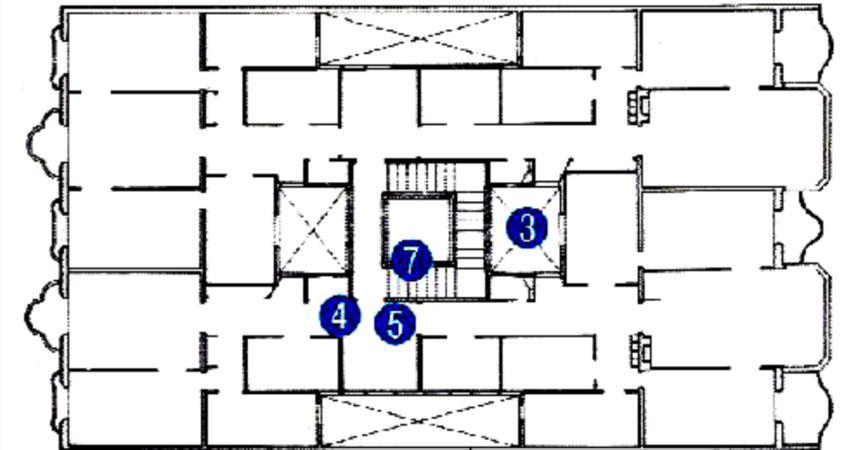


1

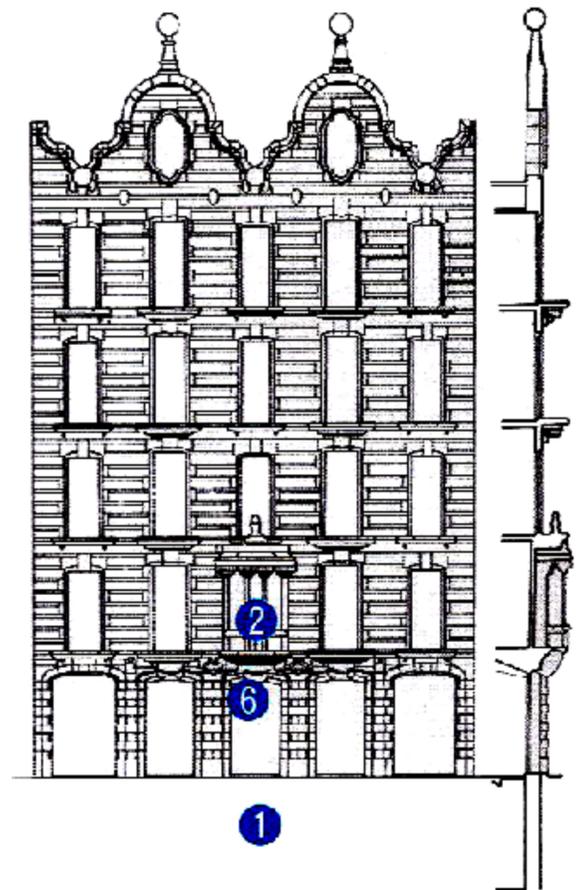


エレベーターと1階ホール

カザ・カルベツト



3,4,5階
平面図



正面の立面図
および断面図

○施主の経歴や好みのもを造形化1898~1900年・・・ガウディが綿織物業者のパラ・マルティール・カルベツトの未亡人とその息子たちのために設計した住宅作品で、同業者が集まるバルセロナ旧市街近くの拡張地域の一角に建てられた。切石積みで仕上げられたファサードの開口部は五連のグループに分かれ、バルコニーと協調しながら、統一感のある凹凸のリズムを形成しつつ秩序を保っている。このリズムは、主階（2階）の開口部の並びから中央のトリビューン（階上廊）の両側へと移り、さらに屋根を隠すバロック風の円形の軒破風(のきはふう)にまで続いている。江戸切り（石材の表面の仕上げ法の一つ）を思わせる切石の端正な壁面の取り扱いが、古典的な抑制された表現を強めている。



YouTube



○ 今日のテーマ

「地中海が生んだ天才建築家ガウディ」の作品と生涯に迫る#01

○ いかがでしたか。感想をお願いします

○ 次回のテーマのご要望を承りますので、忌憚なくお話しく
ださい。